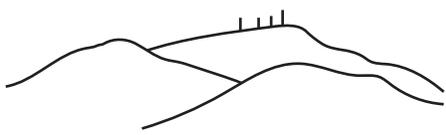


Youth Manna

2022/5/2 - /5/8



マルコ 1:35

さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

2022/5/2(月)

哀歌 2 章

幼い子供は「食べ物はどこにあるの？」と母親に聞き、飢えて死にそうになっている(11-12)。道行く人達は、「これが美の極みと言われた街、全地の喜びの街だったと言うのか」と驚き、エルサレムを中傷する(15)。聖所で祭司や預言者が虐殺され、遂に極度の飢餓のために母親が自分の子供を食べる(20)。南ユダ王国の状況は凄惨なものだった。

同じような状況は数千年後の現代になっても続いている(ロシア、ウクライナの戦争など)。私たちは、ロシアとウクライナ、また平和のために、どう祈れるだろう？「～できますように」と祈るのが難しくても、専門知識がなくても、この著者のようにただ現状を神様に訴えることも大切な祈り方だよ！今日、ロシアとウクライナのためにみんなで祈ろう！

2022/5/3(火)

哀歌 3:1-18

エレミヤは、神様がエレミヤのことを見捨て、祈りを無視し、苦難ばかりを与えるお方のように感じている気がするね！私達もそのように思うことってあるよね！

でも、神様は本当にそのようなお方だろうか？そうではないよね！もし、そう感じてしまうことがあるなら、それは、私達が罪を犯しているからか、神様から離れているからか、生きていると色々な困難があるけれど、そのような時こそ神様に目を向けることが出来ていないからか、神様の存在に気づいていないから、かもしれないね！

神様は、決して私達を見捨てない！祈りを聞いてくださる！時に試練(大変なこと)も与えられるし、愛ゆえの厳しさも与えられるけど、その先には必ず恵みが待っている！

そのようなお方であることを忘れずに、歩んで行こう！

2022/5/4(水)

哀歌 3:19-39

南ユダはバビロンの攻撃に対し、エジプトを頼りとして助けを求めた。哀歌の著者は、国家滅亡の苦しみ、バビロンではなく主によって引き起こされたことを知っていた。そして、苦しみが主の裁きの結果であっても、主以外に解決はないことを知っていたのである。

エルサレム崩壊は、彼らが神に背いた罪のためであった。裏切られつづけてもイスラエルを守ってこられた主が、これほどの裁きを与えなければならぬほど、その罪は大きかった。著者は、赦してもらふ資格のないイスラエルのために「私は待ち望む。主の恵みを」と祈る。私たちが愛し、救いたいと願う主のあわれみは、決して尽きることがない。

2022/5/5(木)

哀歌 3:40-66

エルサレムは、救いの影も形も無いような悲惨な状況になっていた。壊滅した町、捕われた人々、死んでいく人々。神の民とされていたイスラエルの民でも神様から離れれば、あるのは永遠の終わりである。

しかし、本気で主に立ち返る時、救いの道は開かれる。それは一瞬で転じる都合の良いものではないかもしれない。求め続け、期待しよう。

今の世界の状況をどう見ているだろうか？戦争が起きているから悲しいのか？なくても神様を知らない人々はいずれ地獄に行くのは悲しく無いのだろうか？神様の救いを本気で求めよう。

コロツケの日 2022/5/6(金)

哀歌 4 章

▶主と契約を交わし、愛されていたのがイスラエルの民だった。しかし、1-10節を見るとそんな姿はどこにもない。愛と人間性を失うほど飢えに苦しんでいた。それは、主の激しい怒りのゆえだった。

▶なぜ、主は憤ったのか。13節によると預言者と祭司の責任が大きかった。彼らが直接手を下して、正しい人たちの血を流したのではなくとも、王の行動(Ⅱ列 21:16)を黙認した責任が問われる。

▶次の箇所を思い巡らそう。

しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとしてされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。Ⅰペテロ 2:9

2021/5/7(土)

哀歌 5 章

神様の裁きの悲惨さが書かれている今日の箇所だけど、その中にある悔い改めの姿勢にも目を向けてみよう。悔い改めてすぐに問題が解決するわけではなく、苦しみの中にいるけれど、それでも神様に心に向けて賛美をささげている。自分の国のトップが犯した罪の結果もこの中にはあるけれど、それでも「私たち」という言葉をつかうほど自分のこととして悔い改めて、救いを求めているね。

私たちにも友だちや家族、そしてこの地の救いを自分のことのように思い、神様の赦しを求めていこう。困難な時にこそ神様に目を向けよう！

2021/5/8(日)

エステル 1 章

今日の聖書箇所はペルシア帝国の栄光の姿で物語が始まります。しかし帝国の王であっても、何もかも思いのままにはできません。王妃ワシュティは、その美しさまでも自分の誇りにしようとしたクセルクセス王の命令を拒みました。激しく怒った王は賢者7人に対処を尋ね、王妃を退位させ、各家庭で夫を敬わせよとの奇妙な勅令を出しました。しかし「王よ、王妃にも何か事情があったのでしょうか。法律を作ったところで、とうてい尊敬は得られません」と言える人はいませんでした。こうして聖書は、人の支配には限界があり、人のうちには、だれも立ち入ることのできない尊い領域があることを静かに伝えていきます。考えよう：動かせないはずの人の心を、決まり事で縛ろうとしたことはいらないでしょうか？その結果はどうなりましたか？